

Graziella Caselli, Jacques Vallin, Guillaume J. Wunsch,

*Demography: Analysis and Synthesis/
A Treatise in Population Studies, Vol.1-Vol.4*

Academic Press, Elsevier, 2006, 4vols.

18世紀の人口思想にも影響を及ぼした「百科全書」は、フランスが伝統的に知識の体系化に優れている証しだが、それはゴドウィンによりイギリスへ紹介されて価値が再認識されたと言われている。現代版の人口学「百科全書」もまた、今回の英訳により、その価値が多くの研究者に知られることになるであろう。

全8巻から成る *Démographie: analyse et synthèse* (INED ed.) の英訳が、昨年遂に出版された。オリジナルのフランス語版では第1巻が2001年に発行されて以降、年数巻のペースで、最後の第8巻までには5年もの歳月が費やされてしまったが、おそらく併行して準備されていた待望の英語版は見事に全4巻が同時揃い踏みとなった。

本書は、経済、社会、生物、医療、政治、文化、環境など多岐に亘る人口学のバックグラウンドが140以上の章で網羅的にカバーされている。1章分がおおよそ論文1本程度の量に相当し、入門的な導入レベルの基本的な知識や考え方から、最終的には今後の独創的な展望まで概観できる。専門性のレベルにかかわらず、初めてのテーマにはまず当たってみれば随分見通しが効くはずである。その点では、テキストと学術論文との橋渡し的な存在といえよう。各項目とも、基礎理論、実際の応用方法、さらにそのテーマを巡る諸問題など、執筆スタイルがバランスよく統一されており、図表などの視覚効果も十分である。また他章へのクロスリファレンスもあり、本書内でさらなる展開も期待できる。総合事典とはいえ、読み込ませる配慮が大いに感じられる。

方法論としても、経済学や社会学はもとより、歴史的、思想的側面からのアプローチもあり、この多様性もフランス研究者の伝統なのだろう。さらに人口移動などの地理学的テーマも多く、とかく少子高齢化や人口減少研究が盛んなわが国とはまた温度差のある国際的な関心領域を知ることができよう。参考文献も豊富なおうえ、最終パートでは世界の人口学研究・教育機関ならびにテキスト文献などが詳細に紹介されているため、人口学徒には格好のガイドになるであろう。

紙幅の都合により到底その全貌を紹介できないわけだが、第1巻では出生、死亡、移動といった人口動態の分析、期間分析とコーホート分析、人口モデル、人口の異質性問題などが体系的に解説されており、全4巻のなかでも、副題の「分析と統合」の心髄を得るような人口ダイナミクスや人口統計学の本質が凝縮されている。以降、各論で第2巻は死亡や移動の諸要因について、また第3巻では人口の過去と将来の動向や、人口と社会・経済とが関係した項目が並ぶ。最後に第4巻で人口思想や人口政策などがまとめられている。

人口学の事典として親しんできた J. A. Ross, *International Encyclopedia of Population* も陳腐化が否めず、近年では P. G. Demeny, G. McNicoll, *Encyclopedia of Population* や S. Abu Zar, *Encyclopedia of Demography* などが1巻本の中辞典クラスの代表格であろう。わが国でも南亮三郎編・平凡社版と日本人口学会編・培風館版の『人口大事典』を有しているし、館稔『形式人口学』はまさしくデモグラフィのエンサイクロペディア的存在と言えよう。さらに今年にも人口学研究会から『現代人口辞典』の出版が予定されており、決して見劣りしない出版状況だが、本書と同規模の人口学百科全書となると、採算面で現実には困難である。わが国でも当面、本書の利用価値は衰えないであろう。自分の関心がどのように展開しても、第一次接近としてすぐに対応できるよう、人口学者としては書棚の一隅に揃えておきたいものだ。4巻揃いのため相応の価格設定ではあるが、少なくとも図書館への配架など、本書を利用できる環境にしておくべきであろう。(和田光平/中央大学)